

『佐伯さんと約束の橋』

守村知紘

10000文字

あらすじ:近くに横断歩道が出来て以来、ほぼ用済み状態の歩道橋を毎日欠かさず掃除するお爺さんが居た。ただ人の役に立ち、感謝されたいだけなら、もっと良い場所がいくらでもありそうなものなのに。何故そのお爺さんは、そして主人公は、誰も見向きもしないボロボロの歩道橋を掃除するのか？

俺が佐伯さんを轢いたのは、まだ夏休みが明けて間もない小五の秋だった。

自転車で走行中、友人にちょっかいをかけられて気を取られた俺は、前方を歩いていたお爺さんに衝突してしまった。

俺は粗暴な方だから、クラスメイトと取っ組み合いのケンカをしたり、物を壊したりは珍しくなかった。それでも人を、それも知らない老人を轢いてしまうのは初めてで酷く動揺した。

どうしたらいいのか分からずフリーズする俺に、一緒に居た友人は、

「おい、なに固まってんだよ！ 面倒なことになる前に、さっさと逃げようぜ！」

面識の無い相手だから、このまま逃げてしまえば有耶無耶に出来ると俺に逃亡を勧めた。

俺は蹲ったまま動かないお爺さんの具合が心配だったが、自分の罪を深刻に受け取ったからこそ、責任を取らされるのを恐れた。だから友人の勧めに従って、その場から逃走した。

しかし俺の逃亡生活は、一日ももたず終了した。近所の人が目撃していて、家に電話をかけて来たのだった。当然ながら母親には酷く叱られた。

俺が轢いたお爺さん……佐伯さんはあの事故のせいで足を骨折し、転ぶまいとして咄嗟についた手にもヒビが入っていた。ちょっと追突したくらいで悪夢のような重傷だ。

もしかしたら警察沙汰になるんじゃないか。そうじゃなくても百叩きや、法外な慰謝料請求や、とにかく酷いお仕置きを受けるかもしれないと吐きそうなほど恐怖した。謝るべきだとは分かっているけど、佐伯さんに会うのが怖くて抵抗する俺を、母親は拳骨と怒声で黙らせると、無理やり相手宅へと引きずって行った。

しかしきっと酷く責められるに違いないと、通された座敷で青ざめて俯く俺に佐伯さんは、

「そうきつく叱らないであげてください。その子だってわざとやったわけじゃないし、もう十分反省しているみたいじゃないですか」

轆かれて、しかも放置されたと言うのに、佐伯さんは信じられないほどあっさり俺を許した。それどころか慰謝料も要らないと言う。その寛大過ぎる措置に、俺も母も気が楽になるどころか、かえって心苦しくなり、どうにかして償わせてくれと懇願した。

その結果。佐伯さんが怪我の代償に、俺に課したのは……。

「それでこんな歩道橋なんか掃除させられているわけか」

俺はわざわざ冷やかに来た友人にムツとしながら、

「他人事みたいに言うなよ。元はと言えば、お前が悪いんだぞ。お前がふざけてチョッカイをかけなきゃ、あの人を轆くことも無かったし、逃げ出して余計に悪く思われることも無かったのに」

「人のせいにするなよ。逃げようって言い出したのはオレだけど、最終的に逃げるって決めたのはお前じゃん。それにこの罰掃除だって、お前がわざわざ買って出たんだろ？」

「そうだけど……」

納得いかないでいると、

「てか、ここの掃除がそんなに面倒なら辞めちまえば？ 正直にもう辞めたいって言えば、そのお爺さんだって許してくれるんじゃないの？ なんか甘そうな人みたいだし」

「こっちから頼んでもらった仕事なのに、やっぱ面倒だからやめさせてくださいなんて言えるわけねえだろ」

「じゃあ、せめて回数減らせば？ お前あれから毎日ここの掃除をしているだろ？ オレもお前と全然遊べなくて退屈だし。一日、二日くらいサボっちゃえよ」

「残念だけど、そうやって俺が手抜きしないように、掃除が終わったら佐伯さんの家に報告しに行くことになっているんだよ」

「そんなの嘘吐けば済む話じゃん」

「嘘を吐いてまでサボるって……」

抵抗を示す俺に友人は、

「そんな固いこと言うなって。嘘も方便って言うだろ。このくらいの嘘は誰だって吐くって。別にたいしたことじゃないよ」

「でも……」

「……てか、大人に対してはそれで良くて、あんまり馬鹿正直だとクラスのヤツラには舐められるぞ。現に今だって言われているもん。お前が爺さんを轢いた罰で、この掃除をさせられているって話」

「そう、なのか？」

「あんまり真面目に掃除するもんだから、そんなに大人が怖いのかって、みんな馬鹿にしているぞ」

言われてみれば、何人かの同級生達が遠巻きにこちらを見ていたことがあった。その時、確かにクスクス笑っていたかもしれない……あれは俺を笑っていたのか。今更気づいてショックだった。

試しに一日休んでみろと言われて、翌日、俺は初めて掃除をサボった。いつもの時間に形だけの報告をしに行くと、佐伯さんは俺の嘘に気づくこと無く、今日もご苦労様と頭を撫でてくれた。俺はそれが酷く罪悪感だったけど、友人に指摘された通り、それは大人怖さに逆らえない、臆病者の反応に思えた。

だから俺はそのモヤモヤに逆らうように密かな反抗を続けた。一日が二日、二日が三日、三日が四日になっても、歩道橋を利用する人達は特に気にした風も無く渡って行く。

……ああ、本当だ。友人の言う通りだ。

こんなボロイ歩道橋が綺麗だろうが汚かろうが、誰も気にしちゃいないんだ。今まで掃除中に、ここを歩いて行く人達が「偉いねえ」「ありがとね」と声をかけてくれる度に密かに誇らしく感じていた自分が、まるで馬鹿みたいに思えた。

だから俺はすっかり手抜きが癖になり、嘘を吐くのに慣れた。毎日するはずの掃除は、一週間に一度しかなくなり、それすら煩わしく感じるほどになっていた。

そんなある日。とうとう佐伯さんに嘘がバレてしまった。

その日は、ようやく歩けるようになったからと、歩道橋を訪れたそう。ただそこに俺の姿は無く、ついでに橋も汚れていた。

その時点ではまだ、佐伯さんは判断を保留にしていた。例えその汚れ方が、一日二日のものとは思えなくても。今日はたまたま用事があった、掃除できなかっただけだろうと考えようとしていた。

たった今俺が、嘘の報告をするまでは。

それで全てを察した佐伯さんは、

「……君は初めて会った時も、僕を置いて逃げたけど、それはきっとあの時だけのことだと思っていた。ただ怖くて、つい逃げてしまっただけだって」

あの時。自分よりよほど激怒している母から、佐伯さんは俺を庇ってくれた。こんなに怖い思いをした子にこれ以上追い打ちをかけることはない。お灸なら十分に足りている。きつともう、こんなことはしないだろうと言って。

だけど今は、

「……でも本当は違うのかな。君はバレなければ人を傷つけたり、嘘を吐いたりしても良いと思っているのかな」

そんなわけがない。俺は平気で人を傷つけたり嘘を吐いたりするような人間じゃない。そう言いたかったのに言えなかった。だって気持ちはそうでも、行動がそれを裏切っている。

だけど、それは俺が悪いんじゃないで、

「うるさいな！　なんであんな歩道橋を掃除しなかったくらいで、そんなに怒られなきゃいけないんだよ！　言っとくけどお爺さん以外、あんなボロイ歩道橋、誰も気にしてないよ！」

よりもよって、あんなボロイ歩道橋を掃除場所に選んだ佐伯さんが悪い。そのせいで俺は、

「それなのにどうして、人にからかわれてまで、あんな場所を掃除しなきゃいけないんだよ！」

俺の怒声に、佐伯さんはハツとして、

「……そうか。君は誰かにからかわれたのか」

次に少し泣きそうな顔で笑うと、

「お陰様で足は治ったから、君はもう来なくていいよ。今まで気づかなくてゴメンな、和樹君。さようなら」

最後まで俺を責めることなく、ただ静かに別れを告げた。

……どうしてだろう。折角歩道橋の掃除をしなくて済むようになったのに。もう佐伯さんに嘘を吐かずに済むのに。酷いことを言ったのは俺の方なのに。佐伯さんは俺を叱りも蔑みもしなかったのに。

俺はとぼとぼと帰り道を歩きながら、どうしてか涙が溢れて止まらなかった。

あつと言う間に五年の月日が流れ、俺は高校生になった。中高共に冒険はせず、地元の高校に進んだので、例の友人との腐れ縁はまだ続いている。今もソイツと下校していたのだが、

「あ～、アチィ。こりゃ家までもたねーや。大橋商店でアイスでも買って涼んで行こうぜ」

「俺はいいからお前だけ行けよ」

「なんで？ お前だって暑いだろ？ 今ならこの間、迷惑をかけたお詫びにオレがアイスを奢ってやりますよ？」

友人は交友関係も派手なら行動範囲も広く、しょっちゅう余計なトラブルを引っかけて来る。幼馴染のよしみで見捨てられず、喧嘩の助っ人をさせられたことは数え切れない。そのせいで周囲には、俺まで不良だと思われている……むしろ近隣の高校には、俺の名前の方が知られている。そのお詫びをアイス一個で済まそうと言う問題については、今はどうでもよく、

「……あの歩道橋の近くを通りたくないんだよ」

「なして？」

「あの人に会いたくないから」

「あの人って……ああ、もしかして小学生の頃お前が轢いた、あの爺さん？」

すると友人はケラケラ笑い、

「なんだ、お前。まだあの爺さんにビビってんの？ 嘘がバレたくらいで意外と小心だよな～」

馬鹿笑いされてムカつくが、苦手で避けているのは事実なので何も言えない。友人は気を取り直して、

「そんなにビビらなくても、あの爺さんと歩道橋で出くわすことはねーから、大丈夫だよ」

「なんで断言できるんだよ」

「だってあの爺さん、もうあの歩道橋の掃除してねーもん」

「は……？ いつから？」

「さあ？ いつからって言われても。いつの間にか汚くなっていて、誰も掃除してねーんだなあと思っただけだから」

その後、俺は半信半疑で歩道橋に向かった。久しぶりに見た歩道橋は、友人の言う通り飛んで来た落ち葉や虫の死骸や、通行人が無造作に落として行ったゴミで見る影も無く汚れていた。おまけに商店側に出る方の螺旋階段部分には、近くに鬱蒼と茂っている木々の枝が侵入していて、通行を妨げていた。

その荒れた歩道橋の現状を見て、俺はあの人が本当に、ここに来なくなったことを知った。

なぜ。どうして。あの人は掃除をしなくなったのか。

普通なら単に飽きたと考えるところだが……俺があの人のお家に入出入りしていた頃、なぜ歩道橋の掃除をするのか聞いてみたことがある。誰かの役に立って、褒められたり感謝されたりするのが目的なら、もっと皆が使うところを掃除した方が喜ばれるのにと疑問だったからだ。俺の質問に、

『人の役に立てるのも褒められるのも嬉しいけど、それが目的で始めたことではないからねえ』

『じゃあ、なんのために、あそこを掃除するの？』

『……ただそうしたいからとしか言えないかな』

困ったように笑う佐伯さんに俺は、

『変なの。歩道橋なんて掃除しても、何も楽しくないのに』

『確かにやっている最中は大変だし、たまに億劫にもなるけどね。いつの間にか夢中でやって、気付いたら綺麗になっていた橋の真ん中で、少し冷たくなった風に吹かれるの、すごく気持ち良いんだよ』

あの人の言う気持ち良さを俺は理解できなかった。俺が掃除していたのは秋よりも夏の気配が色濃く残る九月の真ん中で、風は熱気と湿度を運び決して気持ち良くは

無かった……最後まで真面目に続けていたなら、その風を浴びられたのかもしれないけど、その前に投げ出してしまった。

……とにかく常人には理解しがたいことでも、あの人にとって、あの歩道橋は特別だった。それなのに掃除しなくなるって……不吉な想像が脳裏を過ぎり、酷く不安になった。

五年前にほんのひと月だけ関わっただけの、それもかなり気まずい別れ方をした人の現状が、なんでこんなに気にかかるのか分からない……分からないけど、妙に気になって、俺はその日の内に、あの人の家を訪ねた。

表札には佐伯とあるから、取り敢えず引っ越しではないらしい。しかしそれは佐伯さん死亡説を補強するマイナスの情報でしかなかった。当時既に六十半ばだったあの人は、老齡を差し引いても線の細い、いかにもひ弱そうな老人だった……正直いつ死んでも、おかしくないと思わされる。それを思うと、まだセミの声もやまない暑い季節なのに背筋がスーッと冷たくなった。そのまま凍り付いていると、

「……あの、うちに何か御用ですか？」

その声にビクッと振り返ると、そこには買い物袋を持ったお婆さんが立っていた。確認するまでもなく、佐伯さんの奥さんだった。当時、佐伯さんの家に行く度にジュースやお菓子を出してくれた人だ。あの人は奥さんに、俺の所業を何も話していないらしく、あの時の小学生だと知ると、喜んで家に上げてくれた。あの人の家にお邪魔するのは抵抗があったが、本人と出くわすことは無かった。何故なら、

佐伯さんはくも膜下出血で倒れて、意識不明で入院しているから。

奥さんによると佐伯さんは三か月前に、歩道橋を掃除に行って倒れたそう。幸い昼間で僅かながら人通りがあったため、すぐに通行人が呼んだ救急車で病院に搬送されたと言うが……馬鹿じゃないのか、佐伯さん。自分の体の方が余程大事だろうに。

「あんな歩道橋、放つときゃ良かったのに。いくら汚くなったって誰が困るわけじゃないのに」

そんな思いから口にする、奥さんは眉を下げた笑って、

「他の人から見れば無意味な行為でしょうけど、夫にとっては大切なことだったんです。あの人にとっては多分、お墓を掃除するようなものだから」

そして俺は知った。

佐伯さんの息子が小学生の頃に、あの歩道橋の近くの道路で車に轢かれて死んだことを。

当時の歩道橋は誰も手入れする者がおらず、ちょうどさっき俺が通った時のような有様だったらしい。ただ不潔なだけでも不愉快なのに、例の枝が交通の妨げになっていて、誰も利用する者は居なかった。だからほとんどの人が歩道橋を避けて、当時はまだ横断歩道の無かった下の道路を通行していた。

この町は当時から全国でも一、二を争うほど、交通マナーが悪かったので、子供を持つ親は皆心配していたそう。奥さんも息子を心配して、歩道橋を使うように何度も注意した。しかし子供は虫の死骸や雨を吸ってグチャグチャになった落ち葉や、犬の糞も嫌だけど、何よりあの木の枝が邪魔だから、あれがある限りは渡りたくないと拒んで、

佐伯さんに頼んだそう。あの木だけでも切ってくれと。

しかし佐伯さんは当時とても仕事が忙しく、折角の休日にわざわざ歩道橋に出向いて木の伐採などやっている余裕は無かった。だから佐伯さんは曖昧に返事したきり、いつまでも木を切らなくて……宣言通り歩道橋を使わなかった息子は、車に轢かれて死んでしまった。

それからだそう。佐伯さんがあの歩道橋を掃除するようになったのは。今さら綺麗にしたところで、息子は戻って来ないのに。まるで懺悔するように何十年もの間、掃除し続けていた。

「あの歩道橋が汚れても、なんの支障も無いなら良かったけど、あの人のずっと大事にして来た場所を、他には誰も気に留めていないなんて、ちょっと寂しいですね」

奥さんは最後にそう締めくくった。

その話を聞いた夜。俺はあの歩道橋に来ていた。ゴミ袋と軍手を持って。なんでこんなことをしているのか、自分でも分からない。

奥さんの話を聞いて同情したと言うのか。善人になったつもりかと偽善者じみた自分に吐き気がする。こんな大変なだけで、なんの旨みも無いこと、どうせすぐに嫌になるに決まっている。途中で投げ出すくらいなら、最初から関わらない方がマシなのに。

それなのに俺は、もう一か月も歩道橋の掃除を続けていた。奥さんには、このことは伝えていない。いつ辞めるかも分からないのに、俺が代わりにやりますなんて言えない。いつ辞めてもいいように、清掃活動も深夜に行っていた。

しかし人目を避けたつもりの作戦は、かえって仇となった。人通りが少ないとは言え、深夜に歩道橋を掃除して目立たないはずがない。あまりに異様な行動だから、誰も構わないでただけで、密かに噂になっていたらしい。

それを俺に知らせた友人は、歩道橋掃除なんてやめろと忠告して来た。周囲には不良と思われている俺が、清掃活動なんて似合わないことをしていたら、確実にからかわれてトラブルになるぞ。お前はただでさえ絡まれやすいんだからと。

そこまでなら小うるさくはあるが、的を射た忠告として呑み込めた。しかし、

「それにあんなボロイ歩道橋をわざわざ掃除する意味なんて無いだろ。すぐそこに横断歩道が出来た今では、有っても無くてもいいどころか、むしろ邪魔なくらいの場所なんだから」

それは昔、俺があの人に投げつけた台詞だった。

それを今、自分がぶつけられて、それがどんなに残酷な言葉だったのか思い知らされて、

「うるせえな！ 何処で何をしようが俺の勝手だろ！」

気付けば友人に怒鳴っていた。そもそも俺が出くわすトラブルの大半はコイツのとばっちりだし、忠告してくれるのはありがたいが、その助言に従って良かったなんてことは

一度も無かった。

逃げようと唆された時も、掃除をサボれと言われた時も。

俺が不利にならないように、馬鹿にされないようにとの助言のせいで、いつももっと大切なものを壊す羽目になった。だから今度ばかりは、これでコイツとの縁が切れても構わないと強い覚悟で友人の助言に逆らった。

しかし今回に限ってその助言は、まるで予言のように、その日の内に的中した。

「見ろよ、本当にやってやがるぜ」

「こんな夜に歩道橋の掃除とか、ボランティアって言うより、むしろ奇行だろ」

歩道橋の上で、見るからにガラの悪い高校生三人組に絡まれてしまった。最初こそ相手をすれば付け上がらせるだけだと無視していた。しかしやつらは酷くしつこく、何とか俺の反応を引き出そうと、

「は？ テメェ、何してやがる」

嫌な気配に後ろを振り返ると、三人組の一人がズボンを下げて股間の汚ねーもんを露出していた。

「何って見りゃ分かるだろ。立ちションだよ、立ちション」

「この辺、便所がねえからよ～」

下劣な品性がそのまま表れたような馬鹿笑いをするソイツらに、

「馬鹿言うな！ 他所でやれよ！」

俺は強く怒鳴ったが、

「悪いけど、もう一秒も待てねーわ……あ～。出る出る……」

じよぼじよぼと音を立てて小便が放出されると共に、きついアンモニア臭がツンと鼻を突いた。クズは何事も無かったように、愚息を仕舞ってチャックを上げると、

「悪いけど、ここも掃除しておいてくれよ。真面目君」

相手は三人。こっちは一人。不利なのは火を見るより明らかだった。それでも、これで喧嘩するなって言う方が無理な話だ。

遊び半分で絡んで来たソイツらと違い、こっちは本気で腹を立てていたせいとか、全開になったアドレナリンの効能で、意外にも序盤は互角に殴り合っていた。しかしそのペースは長くは持たなかった。体力が切れたわけじゃない。強引に押し出されて、階段から突き落とされたせいだった。

俺を階段下に突き落とした、さっきの小便野郎は、階段下で蹲って起き上がらない俺を見て、自分の所業に怯えてさっさと引き上げるどころか、

「こりゃ大変だ。何処か骨折してないか、俺が確かめてやるよ」

そう言って体のあちこちを踏みにじって来た。あまりの激痛に耐え切れず、俺が呻くと、そこを重点的に責め、やめて欲しければ泣いて謝れと命じて来たが、

「……うるせえ、死ね」

この無駄に強すぎる負けん気を流石に呪う。しかしこんなサイコ野郎どもに屈するのはどうしても嫌だった。ヤツラはまだ一応、社会とおさらばする気は無いようで、これ以上の暴行を加えようとはしなかった。しかしその代わりに、

減らず口を叩けないように、さっき俺が拾ったゴミを詰め込んでやろうと言い出した。流石は公共物に小便を引っかけるとな奴らだ。考えることが汚い。こんな奴らに良いようにされている自分が情けない。しかし散々暴行を受けた体には、抵抗する力も逃亡する力も残っていない。

……ゴミ拾いをしに行つて、ゴミを食わされる羽目になるなんて。人生ってヤツは本当に不条理だ。酷く悔しい気持ちで、ソイツがこちらに手を伸ばすのを見ていた。しかし、

「お巡りさん、こっちで一す！」

突然あがったその声に、奴らは驚いて退散して行った。かなり無茶してくれたが、やはり捕まりたくはないらしい。しかし慌てていたとは言え、馬鹿な奴らだ。冷静に考えれば、誰かがこの現場を目撃したとして、近くに警察署も交番も無いのに、こんなに早く警官を連れて来られるわけがないと分かっただろうに。

さっきの声の主は奴らの思ったような、善意の第三者ではなく、

「大丈夫か、和樹！？」

友人だった。俺が暴行されているのを見て、咄嗟に一芝居打ってくれたようだ。まあ、相手がアイツらほどの低能じゃなければ、ギャグにしかならなかっただろうベタな芝居だったけど。

ちなみに友人がここに来たのは偶然では無く、

「昼間のこと謝りに来たんだ。ゴメンな。お前がやりたくてやっていること無駄なんて言って」

……俺の方こそ、あんなに酷いことを言ったのに。わざわざ謝りに来てくれたのかと思うと、なんか胸の中が変な感じになった。俺はコイツに限らず他人に、理解や友情を求めないことにしていた。誰かに胸の内を明かしても共感を得るところか、他の家族や友人との笑い話にされるのがオチだから。

だけど今唐突にコイツに話したくなった。さっき気づいたばかりの自分の気持ち。

……俺は佐伯さんが好きだ。

怪我させといて無視して逃げた俺を、怒りもしないで笑って許してくれた。報告しに行くたびに、いつもありがとうって頭を撫でてくれた優しいあの人が。

別れ際に泣いたのも。この五年ずっと、その名残を引きずっていたのも。

俺がこの歩道橋を掃除するのも、そのせいだ。

それが世間的には、なんの意味も価値も無くても。誰に笑われても、俺はここが誰に

も顧みられず、汚れて行くのが嫌だ。

ここは俺の特別な人の大事な場所だから。

俺の横に膝を着いてジッと話を聞いていた友人は、そっかと軽く呟いて、

「じゃあ、気が済むまでやれよ。多分またお前をからかうヤツが出て来るだろうけど、他人の言うことなんて気にしないでいいから。お前が大事だと思うことをやれよ」

その助言に俺は無言で頷いた。

それからまた一か月。俺は今も歩道橋の清掃を続けている。ただ親や友人と相談して、深夜に掃除をするのはやめた。友人の言う通り、あんなの自らトラブルを招くようなものだ。今はああ言う手合いが絶対に活動しない時間……日が出る直前の早朝にやっている。これだけ早いと、出くわすのは新聞配達員か、ジョギングをしている人くらいで深夜よりも人気が無く、助かっている。

昔は人に気づいてもらえないなら、なんのための善行だと思っていたけど、今は誰かに褒めて欲しいとは思わない。ここを通る人達のために、掃除しているわけじゃないから。

……ただ、一人だけ知ってもらいたい人が居た。きっと叶いはしないけど。でも、それでいい。あんな酷いことを言っというて、許されたいなんて、あまりに凶々しいから。

……しかし、そう思った矢先に、

「こんな朝早くから、ご苦労様」

「っ」

かけられるはずのない声に驚いて、歩道橋の真ん中で振り返ると、そこには、

「さ、えきさん……？」

最後に見た時よりも少し小さくなったあの人が、奥さんに支えられるようにして立って

いた。俺は信じられない気持ちで、

「いつ……退院したんですか……？」

「正式にはまだ退院じゃないけど、先生にお願いして特別に外出許可をもらったんだ」

にこやかに答える佐伯さんに、どうして来たのか尋ねると、

「君の友達が妻に教えてくれたんだ。君がここで歩道橋を掃除してくれていることを。妻からその話を聞いて、どうしてもお礼を言いたくて来たんだ」

……まるで都合の良い夢でも見ているみたいだ。意識不明だった佐伯さんが目を覚まして、わざわざ俺のためにここに来てくれたなんて。自分の所業を顧みれば、とてもすぐには受け入れられなくて、

「礼なんて言わないでください……俺は佐伯さんに酷いことをしたのに……それを謝りもしないで逃げたのに……」

「……人間はどうしても、酷いことをしてしまうよ。それを感じなくなっただけじゃないけど、分かっているならいいんだ。もう自分を責めないで」

あの時、この人を助け起こしもしせずに逃げた俺を許したのと同じ、優しい笑顔で、

「大事な場所を護ってくれた君に、僕は感謝しかないから」

胸の中に押し込めて来たものが、一気に逆流するみたいに涙が溢れた。子供の時ならともかく、高校生にもなって人前で泣くななんてみっともない。そう思いつつ、どうしても止められなくて、せめて泣き顔を見られまいと俯いて顔を隠した。佐伯さんも奥さんも、それに触れては来なかった。視線をそっと外して、多分昇りゆく朝日を眺めていた。

そのまま歩道橋に立ち尽くしていると、空に残った瑠璃色を浚うように、少し強い風が吹いて、

「……ああ、良い風だ。気持ちが良いねえ」

目で見なくても、その声だけで佐伯さんが笑っているのが分かった。その風に拭われるように、ようやく涙の止まった俺は、ぐしゃぐしゃの泣きっ面を上げて笑った。